

「疾患対応領域広げる」

一流を目指す

4年目を迎えたHBMS

5

HBMS（県立広島大
大学院経営管理研究科）
の林利奈さん（34）は、大
手製薬会社のMR（医療
情報担当者）だ。201
6年10月に広島へ赴任
し、18年4月、3期生と
して入学した。

京都市左京区で生まれ

育った。小学校低学年の頃、仲が良かった友達の母親が薬局を営んでいたことが、やがて自分の将来と結びつく。「母子家庭で、確かにうだいは3人か4人だった。お母さんは大変だったと思うけれど、たくましく見えた。これからは女性も資格を取っておくべきだ」と、子供心に思った

大阪薬科大薬学部に進
學し、08年に就職。薬剤
師の道も考えたが、「父
は自営業で、家に居ること
が多かったから会社員
に憧れた」と笑う。社会
年間ほど研修を受け、神奈川県藤沢市の営業所に配属された。

最初の担当は開業医や
中小の病院だった。「医
師は患者を診察するプロ
です。だけど、どの薬を
どの患者にどんなタイミング
で処方するか、これ
は案外難しい。だから私
たちの存在価値があるの
だけれど、提案した内容
が受け入れられた時は、や
っぱりうれしかった」と話す。

製薬会社MR林さん 友人のMBA取得が転機



HBMSの仲間とバーベキューで懇親する林利奈さん(右)

II 南区で

決まった。仕事にも慣れ、
時間に余裕ができると、
スマホでゲームばかりし
ている自分がいた。「こ
のままいいのか。人生
がもったいないんじゃ
ないか」と考え始めてい
た。

「関東の友達が、米国

BBAのキーワードを検

・研究科長を始め、教官

の多くは東京の大学、企

業でキャリアを積んでい

る。「広島に居ながら、東

京で活躍した先生たちの

授業を受けられる喜びを

感じた。異なる領域で働く人たちとのネットワー

クが広がったこともかけ

がえのない経験」と言う。

会社ではいま、生活習

慣病を中心とした業務に

携わっている。「人生1

00年時代と言われる昨

今を考えると、今後は認

知症やリウマチなど、他の疾患にも仕事の領域を

広げたい。そして、いず

れ自分で新しいビジネ

スを考え、周囲に影響力

をもつて人になりたい」

【元田禎】
II つづく

そし、HBMSを知った。
17年度の入学志願書提出
締め切りの前日だった。
卒業証明書などの手配が
出来ず、18年度の入試で
トライした。

戦略コンサルティング
会社「マッキンゼー・ア
ンド・カンパニー」東京
支社長を務めた横山禎徳

・研究科長を始め、教官

の多くは東京の大学、企

業でキャリアを積んでい

る。「広島に居ながら、東

京で活躍した先生たちの

授業を受けられる喜びを

感じた。異なる領域で働く

人たちとのネットワー

クが広がったこともかけ

がえのない経験」と言う。

会社ではいま、生活習

慣病を中心とした業務に

携わっている。「人生1

00年時代と言われる昨

今を考えると、今後は認

知症やリウマチなど、他の疾患にも仕事の領域を

広げたい。そして、いず

れ自分で新しいビジネ

スを考え、周囲に影響力